（１）科目の紹介

<table>
<tr><td>基本情報</td><td colspan="3">平成 24 年度・教養教育・後期・2 単位</td><td>曜日・校時</td><td colspan="3">火　1</td></tr>
<tr><td>モジュール名</td><td colspan="3">コミュニケーション実践学</td><td>科目名</td><td colspan="3">コミュニケーションの比較文化</td></tr>
<tr><td>教員名（所属）</td><td colspan="5">波佐間　逸博（国際連携研究戦略本部）</td><td>教室</td><td>新棟２</td></tr>
<tr><td>受講者数</td><td>１００　名</td><td rowspan="2">1 年生の
所属学部</td><td rowspan="2">教育学部
（４１名）</td><td rowspan="2">経済学部
（５２名）</td><td rowspan="2">薬学部
（４名）</td><td rowspan="2">水産学部
（３名）</td><td></td></tr>
<tr><td>うち再履修数</td><td>０　名</td><td></td></tr>
<tr><td colspan="8">授業のねらい：
　異なる文化に属する者が出会ったとき、友愛の情や誠意があればつうじあえるだろうか。そこに、たがいの慣習的なルールや価値観、言語にかんする理解がくわわれば、もう十分だろうか。出会うだけなら、それでいいのかもしれない。しかし、ひとたびおなじ生活社会にくらし、ひとつの職場ではたらくことをはじめるとすぐに、日常生活のあちこちでややこしい問題が生じる。文化人類学者という異文化のプロフェッショナルも例外ではない。そこには意識の外にあるレベルでの違い、コミュニケーションの実践の違いに由来する問題がある。そして、現代のように異文化接触のはげしい時代には、意識の下にある次元にたいする認識が大切だろう。本授業のねらいは、言語的・非言語的コミュニケーションの多様性と普遍性を、文化的・歴史的な諸事例をとおして理解することによって、他者との共生を可能にするコミュニケーションの実践力をつちかうこととする。</td></tr>
<tr><td colspan="8">アクティブラーニングに向けて工夫した点：
･アフリカ社会のコミュニケーションに関する豊富な事例を、最先端のコミュニケーション論にもとづいて紹介。写真や映像、音声データを多く使う。文献や図書を紹介し、また、ときに著者の略歴も口頭で紹介して、興味をもってもらう。
･提出されたレポートやレスポンスペーパーをみてみると、日本語コミュニケーション力や表現力をあげるための基礎知識を学ぶ必要があると感じた。そこで、「よりよいアカデミック・ライティングのために」と題して、授業内で時間をとった。
･学生がプレゼンテーションをおこなうとき、あるときには、各プレゼンにたいして批評をまじえながらコンパクトにコメントし、別のときには、学生のなかにまじって着席し、まわりにいる学生とおしゃべりしながら質問をなげさせたり、自分が基本的すぎる質問をすることによって、学生のプレゼンテーションへの参与が定型化しないように、演じ方をかえた。</td></tr>
</table>

（２）学修の評価

到達目標	・言語的・非言語的コミュニケーションの多様性と普遍性の概要を説明できる（基盤的知識、環境の意義、多様性の意義）。 ・他者とともにある経験をめぐる探求、＜社会的相互行為論＞をはじめとする学問領域の概要を説明できる（基盤的知識、学問を尊敬する態度）。 ・文字と声の言語文化の特徴や歴史的な変遷、社会変化との関連を口述し、文章で表

	現することができる（批判的思考、社会貢献意欲）。 ・日常的な会話や身振りの社会的・歴史的な多様性について、事例をもとに具体的に説明することができる（多様性の意義）。 ・グループワークやグループプレゼンテーションを通して、授業で身につけた知識や自己の考えをまとめ、口頭および文章で発表することができる（自主的探究、批判的思考、日本語コミュニケーション力、自己成長志向、相互啓発志向）。
成績評価の方法	試験：4 割 平常点：6 割 ・レポート（中間ライティング、期末ライティング） ・プレゼンテーション ・資料要約 ・授業フィードバック ・自己評価（作成した提出物についての自己評価）

（３）授業の進行

概　要：

ノンバーバルコミュニケーション（身ぶりとしぐさ）、バーバルコミュニケーション（会話分析）、共在のモード（集まりと身体接触）、オーラリティ（声の文化と文字の文化）といったテーマをもうける。それぞれのテーマの下、①導入　②グループワーク　③グループプレゼンテーションとまとめ、の 3 パートに分割して、授業をおこなう。

回	学習内容	授業方法（講義、ｸﾞﾙｰﾌﾟﾜｰｸ、ﾌﾟﾚｾﾞﾝなど）
1	はじめに	・授業シラバスを説明（到達目標と授業内容の確認） ・講義（パワーポイント）:「アフリカの概要」 ・グループワーク①:「アフリカのポジティブ・ネガティブなイメージ」をグループで話し合い、発表 ・予習：次回授業のキーワードを説明 ・ワーク②:今回の授業をとおして「アフリカ」について理解したことをまとめ、レスポンスペーパーに記入し提出
2	非言語コミュニケーション①	・講義（パワーポイント）:「非言語コミュニケーションとは」 ・ワーク①:「ことばをつかわないコミュニケーションとして、どのような例があるだろうか」を書き出し、発表 ・グループワーク②:「狩猟採集という生業のイメージを議論しなさい」グループでまとめ、発表 ・予習：次回授業のキーワード説明
		・講義（パワーポイント）:「非言語コミュニケーションとしての発声、挨拶、身

3	非言語コミュニケーション②	体接触」 ・Active Learning のｸﾞﾙｰﾌﾟ分け（出席番号順、席固定、1 グループ 6 人） ・グループワーク①:「会話のルール、ターンテイキングが守られないのは、どのような場面か？」についてグループでまとめ、発表 ・予習：次回授業のキーワード説明と次回予定のプレゼンテーションの課題とその予習方法のヒントを伝えた ・ワーク②：今回の授業とほかのグループの発表を聞いて新たに気づいたことや理解したことをレスポンスペーパーに記入し提出
4	非言語コミュニケーション③	・プレゼンテーション課題「現代日本の若者の発声、身体接触、身ぶり、しぐさ、挨拶をめぐる特徴を、比較をつうじて指摘すること。」 グループワーク①： 調べて明らかになったことをメモする グループワーク②： グループでの意見交換＝各自①を紹介、関連事例を提示、メンバー全体から出てきた意見をまとめる グループワーク③：各グループによるプレゼンテーション（グループ全体の意見を紹介する） ・講義（パワーポイント）:「非言語コミュニケーション研究史」 ・ワーク④:「グループワークで得た情報について、講義に出てきたキーワード（複数可）をまじえながら、記述すること」レスポンスペーパーに記入し提出 ・予習：次回授業のキーワード説明
5	言語的コミュニケーション①	・講義（パワーポイント）:「会話コミュニケーションの導入：会話のルール」 ・ワーク①:「友人と会話をしていて、沈黙が流れると、どのような気分になりますか。」「どんな時に沈黙になりますか。」「あなたはどのようなときに相手の話しに自分の発話をかぶせますか。」についてレスポンスペーパーに記載 ・予習：次回授業のキーワード説明 ・ワーク②:「あなた自身が書いた沈黙と発話重複は、授業で説明したどの概念と関連しますか。授業で使用した単語を使い、１～２文で説明すること。」「あなた自身の積極的な発話重複の経験、ないし、気まずくなかった沈黙の例を文章化すること。」レスポンスペーパーに記入し提出
6	言語的コミュニケーション②	・講義（パワーポイント）:「会話のエントレインメント（乗り込み、引き込み）」 ・DVD 視聴:「ケニアトゥルカナの婚資の交渉」 ・ワーク①:「トゥルカナの人びとの婚資交渉の特徴は？」「新郎側と新婦側は、どうして合意にいたることができたと思いますか。その理由をあなたなりに想像して、記してください。」記入後、発表、提出 ・予習：次回授業のキーワード説明
7	言語的コミュニ	・講義（パワーポイント）:「ブッシュマンの長い語りと同時発話＜話者の能動性＞と＜聞き手の受動性＞を相対化する」

	ケーション③	・「言語的コミュニケーション」の 3 回の授業の振り返り ・ワーク①：レポート作成「言語コミュニケーションの比較文化」 ・ワーク②：何人かによる口頭発表（レポートの読み）
8	共在のモード①	・講義（パワーポイント）:「敵対と友好を揺れ動く民族間関係」
9	共在のモード②	・前回の授業の復習 ・前々回のレポートのフィードバック ・講義：「共在のモード」 ・来週のプレゼンテーションへの導入（これまで一緒になったことのない人と組む、1 グループは 5～6 名、「司会」と「発表者」を決めて、簡単な自己紹介を行ってから、グループワークをはじめる。） ・グループワーク①：ボンガンドの人びとの共在感覚について書かれた資料を読む ・グループワーク②:「ボンガンドの人の共在感覚が成立できる条件とは何でしょうか。」「皆さんの共在感覚とボンガンドの人のそれをくらべて、異なっている点と似ている点」について話し合う。 ・講義：「よりよいアカデミック・ライティングのために」 ・ワーク③：今回のグループワークを終えて、「わからない語彙」「他のグループに対して質問したい点」「自主的にさらに調べてみたいこと」をレスポンスペーパーに記入し提出
10	共在のモード③	・グループプレゼンテーション「ボンガンドの人の共在感覚が成立できる条件とは何でしょうか。」「皆さんの共在感覚とボンガンドの人のそれをくらべて、異なっている点と似ている点」について、グループで議論してまとめ、代表者が発表 ・前回、今回のグループワークや、ほかのグループの発表を聞くことをとおして、考えたことをレスポンスペーパーに記入し提出
11	オーラリティ①	・講義：「オーラリティ、声の文化、文字の文化、ウガンダ北東部カリモジョンにおける歌」 ・ワーク①：オコト・ビテック『ラウィノの歌』のレトリックを読む ・ワーク②：「アフリカに文字が導入されたとき、「民衆のうちに定着した最初のジャンル」が小説やエッセイではなく、詩であったのは、なぜだと思いますか。オングやマクルーハンの指摘を参考にして、その理由をレスポンスペーパーに書いてください。」記入後、提出
12	オーラリティ②	・講義：「声と文字の文化、ボナンゴという特殊な発話」 ・ワーク①：「物理的には仕切りごしに可能な状況でも、コミュニケーションが切れているかのように振る舞う」という私たちのやり口の具体例を一例、文章で記述してください。

		・ワーク②:「おなじ時、おなじ場所で、声を共有することによって、共にいる感覚（共在感覚）が生じている（あるいは生じた）場面を、あなた自身の記憶にもとづいて記述してください。」 レポート用紙に記述し、提出 ・先週のワークのレスポンスペーパーへのフィードバック
13	オーラリティ③	・講義:「ボナンゴという特殊な発話、ファティーク・コミュニオン、外言と内言」
14	総括	・1 回から 13 回までの授業の振り返り ・試験問題の発表と採点ポイントの説明
15	試験	問題 1 「Phatic Communion（ファティーク・コミュニオン）について論じなさい」 問題 2 「以下のテーマから 1 つ選択し、論じなさい： 非言語コミュニケーション、言語コミュニケーション、共在感覚、オーラリティ」
16	フィードバック	・試験レポートの総括

（4）授業の成果

全体の総括	採点のポイント： ・論じるテーマと、どれぐらい、自分の思考をもって向かいあったか。 ・どれぐらい、自分のことばで、そのテーマを論じようとしているか。
今後の改善点	･FD は受講したが、スキルが身につかず、実際に使用するにはいたらなかったクリッカーを、ぜひ導入したい。 ･各班にわりあてられたプレゼンテーションの時間をもうすこし長くとることができれば、学生たちは、学習や発表のデザインを熟慮できるようになる。

（5）アクティブ・ラーニングの充実に向けた提案

ポイント提案	アクティブラーンニングを取り入れた授業の形を具体化できるように、どのような技法があるのか、バリエーションをおさえ、実際のクラスの雰囲気を思いうかべながら、実現可能な形態をつくることが重要と思う。
参考になる資料	「アクティブラーニングの実質化に向けて」（山地弘起）の「別紙４　グループ技法の紹介」 http://www.redc.nagasaki-u.ac.jp/teacher/Int_yamajitmp4.pdf

（別添資料）　なし